授業改善の一つの試み

～「学校現場を知る」講義を通して～

明星大学教育学部教育学科　客員教授　髙　野　良　彦

An attempt to improve my lectures

～Through a special lecture about knowing the actual conditions of one junior high school～

Takano Yoshihiko

キーワード　学校現場・全員野球・ブレないこと

Ⅰ　はじめに

公立学校を定年退職後、縁あって大学の教壇に立って教職を目指す学生を対象に様々な講義をするようになった。今年で、早６年目となる。

改めて私自身の大学での役割について自問する。大げさに言わせてもらえば、私に与えられた使命は、学校現場を知る者の強みを生かし、学生たちに学校の実情などを話す中で、本物の教師を目指そうとする若者を育てることにあると考える。この思いは、６年前から変わらず一貫して持ち続けている思いであり、この思いで学生の前に立ってきている。

ここでは実際に実践した一つの講義を中心に述べてみる。

Ⅱ　「学校現場を知る」講義について

１　学校現場を知る者の強み

目の前の児童生徒の姿を見たり感じたりすることを通して実態を知る。子ども理解は理屈ではなく、直に感じて気づく、また何とかしてよりよい方向を目指していこうとする者の知恵を集めていく作業が大事になってくる。生徒に関わることの緊張感をもちながら、教師としての使命感を奮い立たせて頑張る教師集団の強さ。そして、あの手この手で試行錯誤、悪戦苦闘する中で生徒の気持ちをつかんでいく作業の難しさなどを、生の事例をもとに語っていくことは、学生にとって非常に興味深く、また今後の進路をイメージする上で有効な手立てであると考える。

２　新学習指導要領の特徴を踏まえた授業のあり方を考える

新学習指導要領が令和２年度から小学校で完全実施となり、中学・高等学校も順次実施の運びとなる。言うまでもなく、従来の学習指導要領には主に学習する内容が述べられてきたが、今回の改訂でそれに加えて学習の方法、指導方法までも述べられ、教育の質の向上を目指すことが求められている。すなわち、「主体的・対話的・深い学び」である。

シンプルに考えると、従来の学習指導要領では「何を教えるか」という「WHAT」を示してきたが、今回の改訂ではそれに加えて「どのように教えるか、指導するか」と言う「HOW　TO」と児童・生徒が「何が分かるようになったか、何ができるようになったか」を明確にすることが求められている。すなわち

「CANかCAN NOT」(EVALUATION)である。この２つの点(「HOW TO」と「CANかCAN NOT」)が加わったことが大きな特徴と考え、講義の展開の中でもこの特徴を意識して組み立てを考えてきた。

３　授業スタイルを変える

わたしは、将来教壇に立つ学生がこの新学習指導要領の趣旨を踏まえ、「主体的・対話的・深い学び」を体験し、経験することを通してそれぞれが望ましい授業スタイルを目指していくことが大事だと思っている。

そこで、私の授業スタイルをこの「主体的・対話的・深い学び」を意識した授業スタイルで実践することとしている。このことについては、明星大学教職センター年報第１号に述べているのでここでは省くが、以降の「４　「学校現場を知る」講義の実際」では、講義を行う上で大事にしていることとして１～３の考えに基づいた講義の一例を記載した。

４　「学校現場を知る」講義の実際

(１) 個別課題の提示

まず、右の課題を学生に提示し、新任教師の立場か校長としての立場で現状を改善するための対応について考えさせる。およそ10分程度。

この際にはパソコンやスマホ等を自由に使ってよいこととし、自分なりの解を見つける作業をする。講義の中で学生たち自身が主体的に取り組む活動の場の確保である。

〈課題〉
希望に胸をふくらませた４月、○○市立△△中学校の教師として赴任した。 学校の状況は次のようであった。
あなたは、まず教師としてどのようなことから取り組みますか。あなたの考えを述べなさい。
○いわゆる荒れた学校である。
○授業エスケープが日常化。授業中寝ている生徒も多い。
○喫煙、飲酒等の問題行動あり。
○入学式、卒業式などの集会は、雑然とした中で行われる。
○校舎内が汚い(掲示物がはがれ、いたずら書き、アメ・ガムが廊下などに捨てられている)。
○下級生にとっては、上級生が教師以上に怖い存在である。
○スカートは短い、腰パン、ピアス、茶髪等も見られる。

新任教師の立場か校長としての立場で考えられた学生たちの考えは次の通り。

○(新任教師として) もっと話を聴く。見放さずに根気よく関わる。担任だけではなく、養護教諭とか様々な人が働きかける。授業をおもしろくする。

○(新任教師として) 私ならしっかりコミュニケーションをとる。些細なことでもしっかりと話をします。ダメなものはダメと伝えるが、決して感情的にならないように意識します。声を荒げてもこのような生徒たちは逆上してしまうので、「なぜ」かをしっかり時間をかけて伝えていきます。授業をより実践的なものにする。この学校の課題と教材をうまくリンクさせ、私生活に落とし込めるようにします。保健ならタバコ、学活なら非行少年のこの後のビデオなど、嫌われても粘り強く行い、信頼関係を築きます。

○(新任教師として) 授業中寝ている生徒が多いのは、授業をおもしろくする。かっこいいと思ってやっていると思うから、それは違うことを伝える。校舎にゴミ箱を増やす。→ゴミのポイ捨てが減る。ちゃんと向き合いたい、向き合う気があることを伝える。

○(校長の立場で) まず教員が連携していくよう呼びかけ、見て見ぬふりをさせない、自分もしない。校門の前やたむろしているところは教員に交代で見回りをさせ、指導するようにさせる。校則に決まっていることや法に触れるようなことをさせないために教員全員で注意、指導していくようにさせる。いくらみんながやっていることでもダメなことは指導していく。

○(校長の立場で) まず、落書きを無くしたり、掲示物がはがれている等をきちんと整えるなど、環境の整備から始めるのがよいと思います。次に腰パン、茶髪、ピアス、短いスカート丈を注意します。職員会議において教員全員に同じように指導するように伝えます。その際、先生によって程度が異なること

がないように、腰パン、スカート丈、茶髪には基準を明確にさせます。掲示物に関しても職員全体で、はがれた掲示物はすぐに貼る、落書きしている生徒にはすぐに注意し、また書かれたものはすぐに消すということを徹底していきたいです。

（２）グループ協議、全体発表をもとに全体で協議

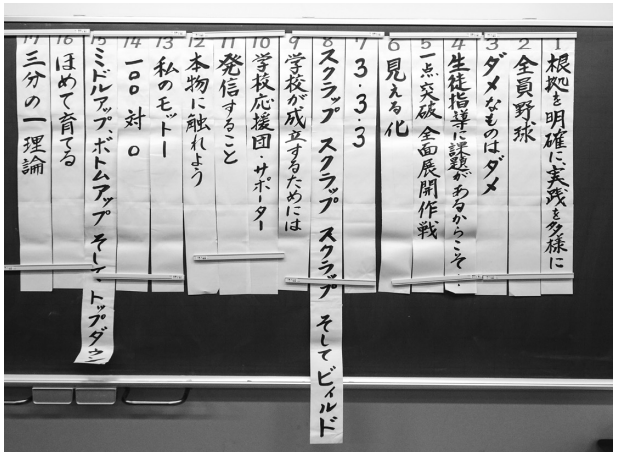
４人グループを編成し、各自が考えた手立てを互いに発表し合い協議し、グループとして望ましい手立てをまとめ、ホワイトボードに書く。このグループ協議に充てる時間はおおよそ15分程度。

次に各グループの代表が、ホワイトボードをもとに全体の場で発表する。80人を越える受講生がいるので、全体で20グループ前後の発表となる。これに要する時間がおおよそ30分から40分。この全体での意見交流から、さらに協議をして考えを深めることが望ましい。

（３）17本の短冊～学校現場における実践の説明～

個別での課題への取り組み、グループ協議、全体発表さらには全体協議まで行うと、概ね60分前後の時間がかかる。残り30分程度の時間を使って説明とまとめをする。説明が尻切れトンボにならないように17の具体の取り組みや考え方などを短い文章やキーワードにして短冊に書き掲示した。時間の範囲内でそのうちのいくつかを説明する。

17枚の短冊の中から、挙手により学生がもっと詳しく聞いてみたいと思う項目、興味や関心を示した項目を発言してもらう。その際には「君ならどう考えるか」を逆に問うてから一つの短冊におおよそ５分程度の説明をする。17の短冊の内、数本の説明で終えてしまうが、「荒れ」に立ち向かう学校現場の教職員の姿勢や考え方は十分に伝えられると考えている。17の短冊の内容は次の通り。



①根拠を明確に、実践は多様に

ぶれずに教育活動を展開するためには、拠り所、根拠を明確にすることが必要である。公立学校である以上、根拠は学習指導要領であることは当然であると考える。大切なのは、学習指導要領の趣旨を踏まえて実践を自由に多様に工夫して展開することにある。子どもの実態、地域の実情を踏まえて創意工夫をすることに学校の特色が出てくる。本校は毎年様々な改善にとりくんできたが、すべてこの学習指導要領の趣旨を踏まえていることは言うまでもない。

②全員野球

全校の先生方の指導のキャッチフレーズである。一人職である養護教諭、事務の先生、学校作業員さんをも含めて全教職員が同じ思い、同じ方向性で生徒に向き合うことを言う。

すなわち、同じ指導方針で生徒に関わること。たとえば、「茶髪、ピアス、異装等は直してから教育活動に参加させる」という点について、誰もが同じ思いで指導にあたれば、時間は相当かかるかもしれないが、学校に「秩序」を再構築できると考えた。

③ダメなものはダメ

本校の先生方、保護者、地域の方々そして子どもたちとの「合い言葉」が、「ダメなものはダメ」である。学校内に「秩序」を再構築するために授業エスケープ、喫煙、正門前のたむろ等には毅然とした対応をするための「合い言葉」である。先生方には年度初めの職員会議で説明し、理解を求めた。子どもたちには全校朝会の時に話をし、理解を求めた。保護者や地域の方々には保護者会、PTA会合、地域関係者懇談会等の話し合いの席で、校長から話をし、理解を求めた。また、学校だよりで「生徒諸君に告ぐ」と題して、

「なぜ、今、ダメなものはダメなのか」を述べ、さらに周知と理解を図った。

④生徒指導に課題があるからこそ……

次にどんな言葉が入ると想像しますか。いろいろな取り組み、手立てがあると思います。どれも間違いではないとも思います。しかし、本校では、生徒指導に課題があるからこそ、ふだんの授業を大事にし、授業改善を全教職員で取り組んで、レベルアップを図るようにしてきました。全員による授業公開はその一つである。また、教師にとって授業が「生命線」であり、授業を通して生徒指導もできると私は信じている。

⑤一点突破前面展開作戦

これは私が勝手に誰にも言わずに密かに先の先を見通し、考えていたものである。一点突破は、まず本校の一番の課題、すなわち授業中にもかかわらず授業に参加しないで正門前にたむろしている生徒の現状がある。これを最優先の課題として解決すること。そしてこれが解決できたら、望ましい学校にするためのあらゆる手立てを一斉に展開していこうと言う数年間にわたる学校改善の青写真である。

⑥見える化

叱られること、怒鳴られることが多い子どもたち。自分に自信が無く、自己有用感も乏しければ自己肯定感も乏しい。ほめて伸ばす取り組みの手立てとして、子どもたちの活動を「見える化」して、きちっと評価しようとするもの。具体には、生徒の取り組みの３つの柱のプロジェクトチーム、掃除の点検、生徒会活動の掲出、あいさつ運動ののぼり旗、学校行事の取り組み状況の掲示、資源回収の表彰、年度末にがんばった学級とその学級担任の表彰、先生方のがんばりも朝会で表彰、などなど。子どもたちのがんばりが全員に見えるように、わかるようにする取り組み。

⑦３・３・３

最初の３は、本校の全教職員ががんばる、保護者、地域の方が学校を理解し、支えてくれる、そして子どもたちががんばり出す。その全教職員と保護者、地域の方々と子どもたちの「３」。２つめの３は、「３」学年ががんばること、がんばってきたこと。課題が多いのも３年生。問題を起こすのも３年生が多い。そんな中で３学年を担当した先生方が学年主任を中心に一人も見捨てないという思いでがんばってくれた「３」。そして今は、学校生活の中で３年生がリーダーとして他学年のお手本になっている。３年生を見習おう、お手本にしようという雰囲気になってきたその「３」。最後の３は、学校をよくするためには、学校の中だけでは限界がある。地域に学校を支える組織、学校を応援してくれる組織があるといい。そんな取り組みをスタートさせたときに最初に集まってくれた人数が「３」人。３人から始まった地域の組織づくり。この「３・３・３」から学校が改善されてきたのだと思う。

⑧スクラップ、スクラップ、スクラップそしてビィルド

世間一般では、「スクラップアンドビィルド」と言われている。一つ壊してそれで一つ新たに立ち上げると言うことだろう。改善や改良をするときによく言われること。本校の現状を考えると、生徒指導が大変で他のことまで手が回らない。先生方も心身ともに疲れもピークの様子。そこで、不必要なもの（そんなものは実際にはないのだが）はやらない、一時休止とする。そして、先生方のエネルギーをすべて子どもたちへ向き合うように考えてみたのです。

⑨学校が成立するためには

藤田英典（国際基督教大学教授）はその著作『教育改革』の中で、「学校は地域の中に存在する」と述べている。私はこのことを金科玉条のように考えて生きている。学校のことをありのままに保護者、地域の方々にお伝えして理解していただく。そして足りないところは助けていただく。このような地域とともにある学校を考える。

⑩学校応援団・サポーター

学校が主催する会合には年間を通していくつもあった。しかも夜間の開催が多い。その都度、関係職員も同席するのだが、昼間に生徒指導に取り組み、心身ともに疲れている先生方を見るに忍びない。そこで、

あらゆる会合を「地域関係者懇談会」と言う会合に統合した。そこで、地域の方々にこの会合の発足時に「学校の応援団、サポーターになっていただきたい」と話し、ありのままの現状をお伝えする中で協力をお願いした。

⑪発信すること

子どもたちの様子、ありのままの姿を保護者、地域へ伝える。地域の会合には校長や教頭が率先して参加して地域とのつながりを図る。学校だよりを武器に発信する。毎週金曜日に発行。保護者の声、反応も掲載する。また、様々な教育雑誌、教育誌から請われれば本校の実情と取り組みを書き、その反響から幅広く学校改善の知恵を貸していただくこともできた。

⑫本物にふれよう

学校が本当によくなるには、地域も変わらないといけない。いわゆる「ワル」の子どもたちのつながりやネットワークは強いものがある。すぐにまとまるし、すぐにアクションを起こせる。よく言えばものすごいエネルギーの塊。それで、望ましい集団を地域に作りたい。望ましい学校を支えてくれる組織を地域に作りたい。そんな思いでスタートしたのが「本物にふれよう実行委員会」。学校を会場にして子どもたちや地域の方々に本物を体験させる。１年目はプロのオーケストラを招いてコンサートを実施。準備、呼び込み、ポスター等すべてボランティアの手になるもの。こういう「草の根」の組織が根付いて定着してくると地域に「力」がつくと思う。この取り組みは今も継続していて、組織も充実し、定着、広がりを見せている。

⑬私のモットー

私のモットーの紹介である。４つある。１つは、凡事徹底。当たり前のことを当たり前にやること。２つめは、無理はしないが、手は抜かない。無理をすると長続きしないからである。できることを精一杯やり続けること。やり通すこと。３つめは、反省はするが、後悔はしない。精一杯自分たちにできることはすべてやる、取り組む、実践する。だから、そこに後悔はない。４つめは、ぶれないこと。

⑭100対０

これは私の個人的な思いであるが、校長が原則として学校に関わるすべての責任を負うという意味で、すべての責任を持つと言う意味での100の責任。教頭先生以下の先生方は、0（ぜろ）。責任なし。ただし、体罰、セクハラ、飲酒運転については、自己責任。ですから、管理職としてすべての責任を負うわけですから自分で納得のいく教育活動を取り組みたいと思うし、先生方には腰が引けずに教育活動に当たってもらいたいという私の思い。

⑮ミドルアップ、ボトムアップ、そしてトップダウン

学校が活性化するためには構成員である教職員の一人一人の意識改革が必要である。具体的にどうするか、一人一人が分掌、分担の仕事を責任を持って取り組んでもらえるようにボトムアップ、ミドルアップをシステムとして取り入れたこと。最後にトップダウンとした。また、各分掌のリーダーが打合会を常に持ち、学校経営に積極的に参加してもらうようにした。職員会議後の１時間をこの会に当てて、ミドルアップをシステム化した。

⑯ほめて育てる

いいところをほめて、認めて伸ばす。授業でも、全校朝会の場でも。学校だよりをとおして。

⑰３分の１理論

私の個人的な見解、思いであるが、あらゆる集団や組織は大きく分けて３つに分類できると考える。たとえば学級集団では、学力の高い集団と中ぐらいの手段と低い集団との３つ。教職員の集団も積極的に生徒指導に取り組んで前向きな集団とどっちつかずの様子見の集団とすべてに否定的な集団との３つ。こう考えて教職員の集団をいかに効果的に変容させるかの手立てを考えた。

（４）講義のまとめ

講義のまとめとして、教育誌や教育新聞に掲載されたこれまでの17の学校の取り組みの資料を取り上げ、教職員の取り組みを通して変容した学校の様子を説明した。

そして最後に講義のねらいについて話した。ねらいの一つは、小学校、中学・高等学校そして特別支援学校は学校種にかかわらず様々な課題を抱えている。その課題の深刻さや課題の性質、その数は、各学校ごとにそれぞれである。課題がないなどという学校はおそらくないに等しい。そんな厳しい現状を知って「心して」学校に臨んでほしいこと。

２つめは、現在の学校現場は様々な課題を抱えて厳しいことは事実であるが、学校の教職員はそれらの課題に腰が引けることなく立ち向かっているという事実を知ってほしいこと。苦戦はしているが、厳しい現実に負けずに立ち向かっている。

３つめは、私の話を荒れた学校を建て直した自慢話ととらえてもらうことは本意でない。
むしろ、組織の一員としてどう動けば学校を少しでもよりよい方向へ改善することができるのかのヒントを見つけてほしい。先生方が変われば、子どもも変わると信じて取り組んでいる先生方がいることを知ってほしい。学校現場はそんな意欲のある若者を求めている。欲を言えば、学生のみんなには、しっかり子どもと向き合える教師になって欲しい、と。

（５）講義を終えて……学生の感想について

○この課題が出されてこんな風に荒れている学校を建て直せないと思った。自分がこのような荒れた学校に新任で行ったら、何でもできなさそうだし、鬱病になりそうだと思った。だが、自分がこうするとか学校の先生で団結した意思があれば、学校はよくなるんだと思った。また、そのがんばりが生徒や地域の人々に広がっていけば、問題が改善されるんだと感じた。中学生の時期はなかなか素直になれなくて問題行動をすることで自分をアピールしたりしがちだけど、その子の本当の気持ちを理解しようとしたり、見捨てない態度が教師には必要なんだと思った。また自分の信念やモットーを持っておくことも必要だと思った。自分がもし荒れている学校に就くことになったら、あきらめずに問題や生徒に向き合っていきたいと思った。

○実際の現場での話を聴いて長い目で生徒指導をしなければならないし、忍耐（結果はすぐ目に見えてわかるものではないが）が必要だと感じた。また、机上で考えるのと、現場の体験ではかなりズレがあるのでは？と感じた。自分はこのようにしたいと考えていても、現場は常に動いているからかなわない。そこで、今の自分にできることは現場の先生の体験を見たり聞いたり、インターンシップなどで実際に足を運んでいろいろな生徒指導のバリエーションを増やしたり、一つの物事に多角度からアプローチできるように知識をたくさん入れておく必要があると考えた。

○私は生徒指導は生徒指導の先生だけでなく、全教職員でやることが大切なのではないかと思っていたので、先生の「全員野球」という話を聴いてやはり大切なことなんだと思いました。それでも中には協力的でない先生がいるわけでそういった先生をどう指導して、同じ思いでやっていくかと言うことが重要だとわかりました。荒れている生徒は精神的に不安定な子が多いと思うけど､だから何か直ったときは、ほめて自信をもってもらう、また何かよくしようと思ってもらうことが、その人の人格を作っていくのではないかと思いました。あれもこれもといろんなことに中途半端では改善しないと言うことがわかりました。まず、今一番やらなければならないことを集中して取り組み、できたら次の課題に取り組むことが生徒指導にとって大切だとわかりました。

○学校現場を見ることなく教育において大切なことを学び生徒指導の方法などを学んでいる私にとって、今日話してくれた内容は当たり前のように学校に起こっていることだと思った。現状、当たり前のことをできず、子どもが苦しんでいる学校があるのだと思った、凡事徹底が大切だという意見は私も賛成できた。合い言葉などとして方針を口に出して広めることで周囲の人が協力してくれるというのは、時間

をかけて態度でそれを示すことができたからだと感じました。理解してくれない、変わってくれない、と最初から関わることをあきらめることなく自分から相手や集団に歩み寄ることが大切なんだと思いました。「授業を通して生徒指導をする」と言う言葉にすごく納得しました。授業で子どもたちと関わる中で自分が教師として伝えたいことを伝える努力をしたいです。社会コースの私は社会科を通して自分の考えを持つこと、周囲に流されずに意思を持って行動したり、判断したりすることを大切に伝えたいと思いました。

Ⅲ　おわりに

このレポートを書くにあたって改めて学生たちの個人レポートを読み直してみて、学生一人ひとりが課題に対して自分なりに解を考え出して、まとめていることがわかった。この点では、学生たちに学校の現状を伝えるというこの講義の目的は達成できたかと思う。個人レポートへの取り組みやグループ協議、全体発表などは概ねよく取り組めている印象を持っている。

また、「４年間大学の講義を受けて一回も寝なかったのは初めてでした」とコメントを寄せてくれた学生がいた。これは授業スタイルが、講義の時間中、常に学生が活動するものなので、自然とそうならざるを得ないのだろうが、主体的に学生が学んでいる姿勢と評価したい。

しかしながら全体発表を通してさらに議論を深めるまでには至っていない。これが私の力量不足のせいかもしれないし、今後の課題でもある。

まだまだ不十分な点も多々あると感じている。是非ご指摘、ご指導いただけると有り難い。

わたしの学校経営

「ダメなものはダメ」合言葉で指導

髙野良彦・　中学校長

2010年に着任した本校は、いわゆる荒れた学校であった。授業エスケープ、校舎内での喫煙、授業中にもかかわらず正門前にたむろする生徒、校舎内にはアメ・ガムそして吐いた唾など。始業式や入学式も雑然とした中で行われた。暴力行為などにより、マスコミ報道も2度もあった、と聞いている。

大変厳しい状況の中で10年度がスタートした。学校の課題は言うまでもなく生徒指導であり、生徒にとって、安心して安全な学校を再構築することであった。

「全員野球」を合言葉に

1カ月ほどたってから全教職員と面談を実施し、個々の教員の感じていること、課題としていることなどを聴き取りをした。幸いなことに現状をこのままでいいと思っている教職員は一人もいなかったし、何とかしなくてはいけないと真剣に考えている教職員もいた。

そこで、改めて今この学校で何をしなくてはいけないかなどを全教職員にアンケートをとり、それを集約し、校長の考えを併せて学校改善のための具体的な手だてを作成した。

狙いは一つである。学校は、そこで生活する人（生徒、教職員、来校される保護者、地域の方々）にとって誰にも安全で安心して生活することができる場所でなければならないこと。

そのために、やることは一つ。正門前にたむろすることをやめさせること、そして卒業式での異装いわゆる特攻服などでの参加を認めないこと。このことだけを全教職員で何年かかるか分からないが実践していこうと職員会議で、全教職員に話をし、問題行動には全教職員で対応していくこととした。

そして、この生徒指導の取り組みに全教職員のエネルギーを全て注ぐこととし、10年度に限っては、他のあらゆることについて優先順位を下位にした。全教職員による生徒指導への取り組みである。まさに生徒指導一本でやるという決意表明であった。

このことは、全校生徒にも集会の時に校長から話をし、理解を求めた。さらに保護者に向けては、保護者会や機会あるごとに同様の話をし、また学校便りなどでも同じ内容を掲載して周知を図った。

また、地域に向けても理解をしていただくために、学校の取り組みをお話させていただいた。

校長として「ダメなものはダメ」という方針を打ち出し、具体的な六つの手だてを10年度に実践したのはまさに一人ひとりの教職員である。ほとんどの教職員が「全員野球で取り組む」ことを自分の体で、自分の行動で示していってくれた。一人ひとりの頑張りが大きかったと思う。

また、3年生の教職員が、学年主任を中心に「一人も見捨てない」という方針で根気強く生徒たちと接していってくれたことが大きかった。一番生徒たちとぶつかるのは教職員であるが、「ダメなものはダメ」としてきっぱり指導をしながらも常に課題の生徒たちと関わりを持つように努めてくれた。

このような教職員の地道な努力のおかげで3年目の現在は、朝の読書活動から静かな落ち着いた雰囲気から一日がスタートできる環境がつくれるまでになってきた。また、苦手な生徒に「取り出し授業」を実施して生徒に学習への自信を持たせることができるようになってきたし、毎週金曜日に全校朝会を実施して整然とした中で話を聴くことができるようになった――など、学校全体が良い方向に向かっている。学校経営や生徒指導に特効薬はないと思っている。ただひたすら当たり前のことを当たり前に地道に取り組むこと、すなわち「凡時徹底」が大切なのだと痛感している現在である。（教育支援サイト=http://es.jiji.com/=に詳細リポートがあります）

■2012年（平成24年）6月19日　内外教育　第3種郵便物認可

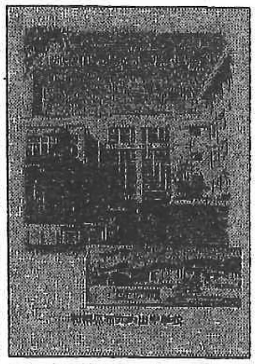
学校経営

4年間の学校便りや経営実践で冊子作成

前　中学校長・高野さん

前　中学校校長の高野良彦さんはこのほど、4年間の学校便りや学校経営の実践、教育活動などをまとめた冊子「　中学校の校長室から」＝写真＝を作成した。

高野さんが赴任した当初、同校は生徒指導の課題があり、「ダメなものはダメ」「全員野球」などを合言葉に学校改善に取り組んだ。教職員は毅然とした姿勢を貫きながらも、「一人も見捨てない」という思いで生徒と接し、成長を促してきた。授業改善にも力を注ぎ、生徒同士や生徒と教師の関わり合いを大事にし、生徒を具体的に褒め・認める場面づくりに心掛けた。



高野さんが学校便りを発行したのは毎週金曜日。学校のありのままの姿を伝えることで、保護者や地域住民の理解を促し、「学校の応援団になってもらいたい」という思いを込めた。内容については、保護者や地域住民から寄せられた生徒の行動に対するお礼の手紙や、学校行事で3年生がリーダーシップを発揮している姿など多岐にわたる。美しい姿が描かれる一方で、生徒指導に関しては、学校を本気で改善したいと宣言、「生徒諸君に告ぐ」と題して、あるべき姿と六つの具体的な行動を示すなど、大変な時代があったことが伝わってくる。

学校便りの最終号のタイトルは「さらに一歩前へ・さらに一段高く」。生徒たちの努力をたたえ、保護者や地域への感謝の言葉をつづっている。

（日本教育新聞　H26・6・9）